94
660

鐵路壹千哩

鐵道院

はしがき

今や人吉吉松間線路開通の運に至り、本邦縦貫鐵道全く完成を告げ、各位の來臨を請うて、開通の式を擧げむとす。然も地や西陲の南偏、京を後にして三日の旅なり。茲に車窓より見ゆべき名勝を記して、清覽に供す。幸に車中の伴侶たるを得ば、啻にこの小册子のみにあらざるなり。

薩摩獅子

ふたはしら　遠つ御祖の　あとだれて　逆矛立てしその峯に　絶えせぬけむり　千代かけて　嵐に晴る、霧島の神のみすゞも　こと古りて　まことに天の　かごしまの足駄のおとも　たかぐ〳〵と　鶴の丸山いたゞきの　あかきは花のさくら島　磯のおさのり　岩波の　流に洗ふ　さつま櫛　とけて　さかしき奮進の　獅子の勇みや亂れ髪　影をうつして飛びかけり　むぞうらしげに　百丈のたけき上より蹴落しつ　こゝろをはかり代々をつぎ　其隼人の手ぶりぞと　いはでめぐみの深見草　いよも　豐かに　ことぶきは　千代になァ　八千代にふるともや　動きはせまいの　君が　をさむる國ぢやほどになァ

鹿兒島行

鐵路一千哩

鑣下天高秋水清、幾百の貴賓を載せたる汽車は、今や靜に新橋を立ち出でぬ。品川沖の七砲臺、大森の八景園、神奈川沖の眞帆片帆、風光掬すべきものあれど、見馴れし人の目を牽くに足らず、汽車は早くも平沼に至るべし。

【平沼】は横濱市内の一驛、此地古は一大入江にして、もとの神奈川湊にあたる、明治五年、鐵道線路の築造により、横濱港灣と相限り、近年更に盛に埋立てられたる爲め、全く舊形を失ひて、繁昌の市街と變じ、其東北隅僅に水面を見るのみとなれり。

程ケ谷を後にして、品野坂の隧道を出づれば相摸の國。戸塚を經て大船に至る左窓離山見ゆ、此地横須賀線の分岐點なり。藤澤に至れば町の後なる小山の麓に、一大伽藍を望むべし、これ時宗の總本山遊行寺なり。茅ケ崎以西線路相摸灣に近

づき、時々車窓の目を樂ましむ。平塚あたり右窓一群の山嶽連なるを見る、中に那翁帽を冠りたるが如きが高く聳ゆるは大山なり。花水川を渡れば右窓樹木鬱蒼たる山あり、これ高麗寺山。鳴立澤は古松の梢僅に其の所在を語るのみ。一帶の海濱は則淘綾の磯、蒼林の中藤公の滄浪閣を偲ぶべし。

一【國府津】は小田原を控へ、箱根、湯河原、熱海等の各溫泉へ行くべき衝なれば、旅客の出入甚盛なり。左窓一群の山嶺を見るは箱根なり。汽車はこれより西北に迂回して、弓の如き線を描きて酒匂川の上流に沿ひ、次第に足柄の翠巒に近づく。松田驛は道了權現に參詣せむとする人の下車地、左窓明神嶽の麓に、老杉鬱然たる密林を見るはそれなり。山北には鮎鮨の名物あり、これより以西は東海道線中第一の嶮難地、隧道鐵橋甚多く、加ふるに地盤の傾斜急なるが故に、補助機關車を附して運轉す、隧道に出て、は入ること十數回、明暗趣を變じ、危峯奔流應接に暇なし。小山ははや駿河の國、登り詰むる處は御殿場なり、地は海拔千五百尺、

富士の靈峯右に緩やかなる傾斜をなして次第に高まり、屹然として雲表に峙てり。佐野、三島を過ぎ黃瀨川を渡れば、右窓愛鷹の山群高く前面に聳えて、富嶽の英姿を遮り、僅に山頂の一部を許す、富士隱といふものこれなり。

一【沼津】は駿河灣に臨める風光明媚の地、避暑に避寒に都の人の足繁し、名物　桃羊羹、鯛でんぶ。

沼津の次驛は原、この附近より鈴川を過ぎ富士川を渡る間は、いはゆる田子ノ浦曲、望嶽第一の名あり。原驛あたり右窓松蔭寺、浮島沼を見るべし、寺は白隱禪師の住めりし所、沼は平軍潰走の水禽飛揚の地。鈴川驛附近左窓松樹の茂れる沙丘は天之香具山なり。富士川を渡れば岩淵、蒲原、白沙一帶山を戴き水を抱く、吹上濱といふ、伊豆の連山模糊として、海に沿うて走る車窓の人を欵待す。薩埵山の隧道に近づく頃、珍らしくも左窓より後に不二を仰ぐべし、隧道を出づれば興津、汽車淸見寺々門の下を走る、一帶の海濱は淸見潟、三保ノ松原海に浮びて富

士の眺、また比すべきものもあらず、松原の中程老松鬱として茂れる所御穂神社あり。江尻に至れば、左窓清水港を見るべし、富嶽の眺望を以て名ある觀富山龍華寺、また此處より近し。江尻より少しく進めば一條の松並木あり、田畑の間より山上に通ず、これ草薙神社の詣道、地は日本武尊の叢雲の劍を以て草を薙拂ひて、野火の難を免かれ給ひし所、社は景行天皇親しく巡視の際、尊の靈を祀られたるもの。

一【靜岡】は古の府中、家康茲に老を養ひて生を終へぬ、久能の東照宮はこれより二里半、老樹滿山、宮殿參差、閑寂窈窕の異境なり。驛の右に見ゆる丘山は賤機山、南麓淺間神社あり、祠殿の華麗を以て世に鳴る。名物山葵漬、驛を發すれば右窓近く巨刹を見るべし、これ市内第一の寶臺院、安倍川を渡れば右に吐月峯見ゆ、一帶の山脈蜿蜒として行手を遮るが如きは宇津ノ山、山麓は蔦ノ細道なり、今鐵道は其山脈の南を走る。燒津驛を過ぐれば、左窓疎林の中に燒津神社を見る、宮は日本武尊を祀り、地は尊の向火を以て賊徒を討滅したまひし處。藤枝に至れば右窓遙に町を認む、熊谷直實の蓮生寺はこゝにあり。

駿遠二州の境大井の巨流あり、幕府時代橋梁舟筏の禁ありしを以て、人の渡るや蓮臺或は肩背に賴りき、島田、金谷の間、右窓朝顏が川留めの歎に濡るゝ袖もあらむ。金谷驛を過ぐれば直に隧道に入る、隧道の上は武田德川の古戰場牧野城址なり。出で、一小溪流を渡る、川はこれ菊川、上流太平記に名高き菊川の里あり、小夜ノ中山夜啼石またこれより近し。袋井驛に至れば、秋葉山三尺坊を移し、有名なる可睡齋あり、秋葉本宮また此驛より詣づるをよしとす。中泉を後にして天龍川の鐵橋を渡り、天龍川驛を過ぐればやがて濱松なり。橋は長さ二千八百尺、東海道線中之に過ぐるものなし、川の東岸池田の行興寺に諧曲に名高き熊野の墓あり。

一【濱松】は地平原に居ると雖、近く江海を控へ、孔道の衝にあたるを以て、古より東海の名邑とす。家康の武田氏を討つや、此地に據り、以て天正十八年の江戸移封に至れり、驛の右方町の後方一帶の丘陵あり、丘上の森林中高き建物の見ゆる

は天守閣の舊址。名物　濱名納豆　忍冬酒

濱松を後にして、舞坂より今切の鐵橋を渡りて鷲津に至る間、北に濱名の平湖あり、南に太平の巨洋あり、左顧右眄宛然たる横披の大活畫を見るが如し。湖口の東岸辨天島は、近時海水浴地として著はれぬ。湖水を隔て、一脈の連山あり、概ね禿山なれども、中央の一部蒼々として樹木の茂れる溪谷あり、これ奥山の半僧坊と稱せらる、方廣寺のある處なり、鷲津驛を過ぐれば左窓本興寺見ゆ。

汽車三州に入りて二川驛を過ぐれば、右窓近く小丘あり、岩石累々たる上に觀音の像高く屹立す、窟觀音これなり。

一【豐橋】は舊時の吉田、「吉田通れば二階から招く」俚諺人の口に剿れたり、豐川其北に流れて百二十間餘の板橋あり、これ有名なる豐橋、城址あり、右窓より見るべし。此地豐川稻荷を以て名高き豐川線の接續地。名物　濱名納豆　玉霰　御油、蒲郡の邊、汽車渥美灣に沿うて展望秀絶なり、蒲郡の左窓一帶の松林あり、

これ戀ノ松原、竹島半圓形をなして、樹木鬱蒼として美しう波に浮べり。岡崎は徳川氏勃興の地、驛を出づれば矢剱川を渡る、十數町の上流に見ゆるは矢剱の長橋にして、これ當年の猿面冠者が蜂須賀小六と邂逅したる所、川に沿うて城址あり、今公園たり、園内東照宮を祀る、祠傍家康生湯ノ井あり。汽車尾州に入りて大府驛、武豐線の分岐點、驛を過ぐれば青松赭山の間一湖あり、明鏡を磨く、汽車之に沿ひて走る。此湖水より右方に當れる山丘の内部は、桶狹間の古戰場、風聲悲しく鳥鳴哀なり。熱田は熱田神宮の鎭まります所、左窓近く畫尚暗き茂林を見るは、卽その社域。社の左方人家の間にある森林の中、八劍神社あり。

一【名古屋】は三府に亞げる大都市、近年私に中京の稱を立つ。汽車は玆より岐れて、伊勢路を經て京阪に向ふ關西線あり、木曾路を經て東京に至るべき中央西線あり、將來の發展想ふべし。五層の樓閣巍々として雲表に聳え、屋上不斷の金光を吐くは、問はずして金城の鯱、數里の外尚仰望すべし、若宮八幡宮、大洲の觀音等

社寺壯麗なるもの多し。名物　宮重大根　魚煎餅　陶器瀬戸燒

清洲は織田氏勃興の故邑。五條河畔老樹壞濠古の夢を語る。枇杷島より稻澤に至る間、右窓近く見るを得べし。一ノ宮を過ぐれば、町の背後鬱然たる森林を望むべし、これ神武の御世の鎭座、尾張の一ノ宮眞清田神社の鎭まります所。木曾川は尾濃の境、東堤の櫻、川島の桃、近時世に著はれぬ。

一【岐阜】は尾濃平野の北偏、東に稻葉山を負ひ、西北に長良川を帶びて、山水清麗なり。山の北偏は岐阜の古城址、西麓稻葉神社あり、川は古より鵜飼の奇觀を以て知られぬ。名物　鮎粕漬　守口大根漬

長良川を渡り、穗積を過ぐれば、左窓養老山脈を望むべし。揖斐川を渡れば已に大垣なり。

一【大垣】は戸田氏の舊地、驛の左方巨鹿城の天守閣、巍然として目前に峙てり、これ關ヶ原の役三成の軍議を凝し、所。養老瀧はこの驛より近し。名物　養老松風

柿羊羹

垂井に至れば、左方南宮山鬱として聳ゆ、山麓美濃一ノ宮南宮神社あり。關ヶ原驛附近は慶長の古戰場、車窓を吹く風の聲自ら啾々たり。不破ノ關址を後にして、柏原驛に至れば、美濃と近江の境なる寐物語ノ里あり。長岡驛のあたり右方伊吹山を望むべし。形勢頗る雄偉なり、山は日本武尊の登山ありしより其名著はれ、命の毒霧に侵され給ひしを癒しまゐらせたる、清泉醒ヶ井といふは、醒ヶ井宿の旅舍錢屋の前にあり。

一【米原】は琵琶湖畔の小都市、磨針嶺の西崖下にして、朝妻の入江に臨む、嶺の頂上なる望湖堂は湖山の觀望を以て世に知らる、此地北陸線の分岐點なり。名物　鮒鮨

米原より西、汽車は湖に近づきては離れ、はなれてはまた近づく。彦根は井伊氏の舊地、西は太湖に臨み、北に裏湖を湛え、水陸形勝の地なり。驛の前面金龜山の

森林中、白壁皓々たるは舊城の天守閣、今公園たり、望觀目を新にす。麓に樂々園あり、裏湖に臨む、模擬の八景を初め、結構數奇を極む。三成の佐和山も尙古壘を存す、墓あり。河瀨、能登川驛を過ぐれば、右窓近く琵琶の一支湖を望むべし。腰越隧道の右方に在る山丘は、信長の安土山、遺礎殘壘僅に存して、滿目蕭條、悲風空しく舊時の山河を吹く、山腹信長信忠の像を安置せる總見寺あり。野州驛のあたり左窓富士形の山見ゆ、これ近江富士の名ある三上山、山容の美矚目すべし、これより馬場に至る間、或は左窓に、或は右窓に、しば〳〵其姿をあらはし、湖水の淸漣と共に、車窓の人を樂しましむ。姥ケ餅に名高き草津驛を過ぎて、草津川の河底隧道を後にすれば、右窓に見ゆる村落は野路、次で過ぐる河底隧道は、古より名高き野路の玉川なり。これより右窓琵琶の太湖の一大明鏡を磨くを見む、湖の彼岸に最高く峙つは比叡、麓に唐崎の村落を見るべし、右に遠く連るは比良山なり、大津の町は、後に長等山を帶ぶ、石山、粟津、矢橋等、所謂八景の大部、皆一眸に集む。汽車進んで、瀨田川の鐵橋を渡れば、下流瀨田ノ橋見ゆ、一小島を挾みて大小二箇より成れり。石山驛の左窓、瀨田の流に近く屹立する小峯あり、これ石山なり。これより、右窓翠松一帶路を挾んで、綠蔭長く連なるは粟津ケ原、義仲戰死の地なり。

一【馬場】は大津の一部、これより大津に至る支線あり、右窓義仲寺を見るべし、木曾殿と脊中合せに、俳聖芭蕉の墓あり、馬場に續きて大津の市街見ゆ、これ古の滋賀の大津宮の地、市の背後に連る長等山の山腹に三井寺を見るべし。逢坂山の隧道を出づれば大谷驛、山は昔時關所の設けありし所、驛を後にすればやがて山城に入る。右窓山に沿ひて、一條の堤防長く續くを見む、これ疏水なり。山科は大石良雄幽棲の地として知らる、右窓藪の中に松の茂れるあたり其舊址あり。右に續きて將軍塚あり、老杉鬱蒼としてその靈を護れり。驛を過ぐれば左側に勸修寺あり、これ山階宮なり。これより右方、小野陵、深草陵、法華堂陵等、つゞ

いて見るべし。稲荷驛に至れば、右窓高く峙つは稲荷山、山麓稲荷神社あり、車窓の正面、朱閣丹樓竝び立ちて老杉の翠と相映じ、甚艶美なり。鴨川の鐵橋を渡れば、右窓一帶の連山蜒蜿として亙る、これ蒲團著て寐たる姿や東山なり。山麓に見ゆる長き建物は三十三間堂、其後方の頂巔に見ゆる寶塔は豐太閤の廟所なり、稍離れて高く、殿樓と塔と一廓をなして見ゆるは清水觀音、更に遠く、綠樹の中に白きものの見ゆるは圓山公園、後に接する寺院は智恩院なり、なつかしき古き都は、かくして車窓の人に會遊を思ひ起さしむるなり。

一山紫水明の【京都】は、また更めて說くに及ばじ、驛より右窓華麗壯偉なる堂宇を見るは東本願寺。その左に宏壯なる西本願寺見ゆ。東寺は桓武天皇の創造、嵯峨天皇之を弘法大師に賜ひし古刹なり、驛を發して左窓近く、崇大なる數多の寺院の中、高く峙つ塔の見ゆるはそれなり。尙進んで汽車京都の市街に別れむとする頃、右窓遙に白堊皓々たる二條城を望むべし。名物　八ッ橋　祇園團子　千枚漬

鷺しらず

桂川を渡りて向日町に至れば、右窓低き丘陵の連なるは、長岡の古都址。山崎驛に近く右窓の外に聳ゆるは、山崎合戰に秀吉光秀の爭ひし天王山、左窓男山見ゆ、名高き八幡宮の鎭まります所なり。驛を過ぐれば、左窓水無瀨宮の森を見る、はや攝津の國なり、承久の三上皇を祭る、尙進めば小村あり櫻井といふ、村のはづれ、三基の石碑、二本の樹木、淋しげに路傍に立てるを見る、これ世に楠公父子訣別の地と傳ふる所、石碑の傍に存する枯木の殘株は、古の子別ノ松なりといふ。

一【大阪】は海內無雙の商業地、南方攝津灣を控へて海陸の產物を呑吐す、市內大小の運河四通八達して、水の都の稱空しからず。太閤の大阪城は日本第一の堅城、今第四師團の營所たり。高津宮、天滿神社、四天王寺、鶴滿寺、社寺の壯麗なるもの多し。驛は市の北に偏するが故に、唯一小部分を見るに過ぎず、左窓漸く東西本願寺の別院を見るべし。名物　粟おこし　雀鮨

神崎は、大阪の次驛、阪鶴線の分岐點なり、驛のある處は古の長洲濱、觀月の名區たり。西ノ宮驛より住吉に至る間、右窓一帶の山嶺あり、これ六甲連山なり、摩耶山は連山の左端に特立せる一峯、老樹鬱として峯勢頗嶮なり、山頂忉利天上寺あり。

汽車神戸市に入らむとして一小流を渡る、新生田川といひ、其上流は布引瀑なり。右窓生田神社見ゆ、社後の森は箙の梅に名高き生田の森、三ノ宮驛あたり右に諏訪山を見るべし、山の西に諏訪明神の祠あり。

一【神戸】は東海道線の終點、地は五港の一として殷賑横濱と伯仲す、驛の前に通ずる道路の行き當りに、湊川神社あり、社の北なる廣嚴寺は、俗に楠寺といひ、正成の一族と共に自刄せし處、今尚遺物を存す。名物　牛肉、瓦煎餅、玉簾、菊水饅頭

神戸より西下關に至るまで、線路多く瀬戸内海に瀕し、展望目を樂しましむる幾度なるを知らず。兵庫驛を出づれば、直に新湊川を渡る、これより明石に至る間、一帶の翠樹右に屏風を樹て、淡路島左に、呼べば將に應へむとす、而して汽車は青松白沙を縫うて走る、優艶明媚また飽くを知らざるなり、鷹取山を右に眺めて進めば、はやくも須磨に至る、地は水碧沙明太だ優雅の地、壽永の古戰場として、平門の哀今尚山河に殘る。行平の松風村雨堂は見えず、綱敷天滿宮を右窓に見るまもなく驛を過ぐ。一ノ谷川の小橋を渡れば、右窓壽永帝の内裏跡を見越して、鐵拐峯を仰ぐべし。二ノ谷川三ノ谷川を渡れば、右窓近く敦盛塔を見るべし。境川を過ぐれば、播磨國、鹽屋垂水を後にすれば、やがて舞子公園に入る。松は高さ二三丈に過ぎざれど、概ね梢を齊しうして枝幹屈曲す、一樹に一樹の趣態あり、百樹に百樹の風韻あり、松林の北丘陵の上高く、有栖川宮の御別邸を仰ぐべし。明石に至れば、一群の老杉森然たる中に、高く白堊の隱見するを見る、これ明石の城、城の右に續ける丘陵は、人丸山なり。明石の西、土山、加古川、

寶殿、曾根各驛の海岸、別府の手枕松、尾上の松、鶴林寺、高砂の松、曾根の松、石の寶殿等を巡遊するを播磨名所巡りと唱ふ、加古川驛を出づれば、左窓鬱蒼たる松林を見るべし、これ刀田山鶴林寺。寶殿驛を出で、、左窓山の中腹松樹茂れるあたり、石の寶殿の拜殿見ゆ。進んで曾根驛構内に入らむとする時、右窓笹山の麓五輪の塔を見る。これ兒島高德の父、範長の墓なり、御著驛を過ぐれば、早くも姫路城の白壁高く翠微の間に聳ゆるを認むべし。驛に近づくに從ひ、左窓小鹽城址見ゆ、これ赤松氏の故墟にして、嶺頂東西に擴延せり、袴腰の名あり。

一【姫路】は酒井氏の舊地、城は天正中秀吉の築く處、五層の城樓右窓の目に入りて、其色白く、岡山城の黑きと相對して、鷺城烏城の稱あり、今第十師團の地たり。地は播但線の分岐點、南は飾磨、北は城ノ崎に及び、將に陰陽の連絡を全うせむとす。名物　玉椿　明珍火箸

姫路より西、右窓增位山、廣峯山、書寫山を仰ぎつ、走る、揖保川を渡れば龍野驛、町は右窓里餘を隔て、見えず、四十七士に名高き赤穗も、那波驛の南遠く三里を離れたり。

一【上郡】は千種川の東に居り、赤松谷の口なり。これより次驛三石に至るの間、山陽線第一の稱ある舟坂山の長隧道を過ぐ、山は卽ち播備の界、備後三郎高德が、鷲興を奪ひ奉らむとして果さゞりし處。吉永驛の南、光政の閑谷聖堂あり。和氣、万富、瀨戸、西大寺の各驛を過ぐれば、岡山の烏城已に車窓の目に入るべし。

一【岡山】は池田氏の舊地、東に旭川を帶び、南は水脈兒島灣に通じて、四國の高松に至る連絡の衝たり、明年宇野線開通の時に至れば、一層の便利を感ずること、ならむ。左窓市の北偏、烏城の天主閣雄然として聳ゆ。城は天文中金光宗高の築く處にして、後、宇喜多直家の修築する處、いはゆる烏城なり。城の北日本三公園の一後樂園あり、旭川の水を引き、樹石を安排して景趣を作爲す。驛に近く岡山寺、蓮昌寺、や、はなれて國清寺あり、是を市内三大巨刹とす。此地中國鐵道の

接續點、線は岐れて北は津山に至り、西は湛井に至る。名物　吉備團子、調布、米のなる木、保命酒

岡山より備中に入れば庭瀬驛、驛の北一里を隔て、吉備津宮鎭座す、これ備前備中備後三社の第一に居るもの、備前のと相距る僅に十町餘に過ぎず。倉敷驛に至れば、左窓近く小丘あり、老樹鬱蒼たるを見るべし、これ倉敷公園なり。有名なる豪溪の奇景は、この驛より北西六里を隔つ、玉島は玉島灣の西南、左窓遙に望むべし、南方の海上水島あり、これ知盛敎盛の源氏の軍を邀へ擊ちて破りし、古戰場なり。金神驛に入らむとする頃、左窓巍々たる社殿の峙つを見るは、金光敎總本部たる金光神社なり、沙美海水浴場亦此驛より近し。鴨方を過ぎて、笠岡驛に至れば、右窓に古城山公園を見るべし、港の南方を屏障する島嶼を神島といひ、殆んど聯續の狀をなす。笠岡より幾何もなく備後に入り、大門を經て福山に達す。

一【福山は】元阿部氏の城下、驛の前面屹然として聳ゆるは、舊城の天主閣、城は鐵王山久松城と稱し、元和中水野勝成の築く處、城內今公園たり、阿部氏の祖を祀れる阿部神社あり。賢忠寺は此地第一の大刹、車窓望觀すべし。風光の美普く世に聞ゆる鞆の仙醉島、阿伏兎の觀音、此驛より至るべし。名物　柚餅

一【尾道】は備後第一の海市、四國の多度津に至る連絡の衝たり。大寶愛宕の二山其後に峙ち、向島其前面に横はりて、一海峽をなす。海山の展望溫藉、玉ノ浦の稱故ありと言ふべし。此地佛閣多く、四十八寺と唱ふ、千光寺、西國寺、淨土寺を三大伽藍といひ、右窓高く仰ぎ見るべし、中に千光寺は佛閣雅麗にして、觀眺の勝第一に推す。これより西、糸崎を經て、三原に至る間、風光明媚、須磨明石を恥ぢしむ。名物　疊表

一【糸崎】は古の長井ノ浦、神功征韓の時、御船を寄せて水を汲ませ給へる處、驛の東八幡宮境內調ノ井戸あり、此地今開港場たり。

三原驛を過ぐる時、右窓三原城址を見る、城は小早川隆景の築く處、水に臨んで

眺望佳なり。

藝州に入りて最初の驛を本郷驛とす。沼田川の右岸なり、右窓小早川の高山城址を望むべし、安藝の高野と稱せらる、佛通寺は、其東御許山に在り。

河内驛のあたり、左窓近く篁山を望む、山上の竹林寺は、天平年間の勅願寺なりと傳ふ。白市を過ぎて西條驛に至れば、左窓原中に隆起する形狀秀麗なる一孤山を認むべし、これ鏡山。大内氏の盛時此に築き、西條城といひ、安藝を鎭壓したり、山の南吾妻子ノ瀧あり。八本松、瀨野を經れば海田市、吳線の分岐點なり、神武天皇の埃宮は、其跡さだかならねど、西方一里の府中村内なりといふ。

一【廣島】は中國第一の繁華、淺野氏の舊府、城は毛利郷元の創築する處、左窓天主閣を仰ぐべし。征淸の役、聖上親征、大本營を城中に設け、軍國の事を統べたまふ、我軍大捷、武威八表に揚る、此地實に國史の上に不朽の名を得たり、近く日露の戰役に際しても亦策源地たりき。藩祖長政を祀れる饒津神社は、二葉山の麓、公園内にあり、右窓一帶の丘陵、樹木の鬱蒼せるを見るものこれ、泉石花木の幽邃なるを以て世に知らる、淺野氏の別邸泉邸は、支那西湖の景を模したるもの、驛を發すれば、直に左窓畔中に入らむ。國泰寺、佛護寺、誓願寺は、市の三大寺、國泰寺は當年の安國寺、惠瓊の建立に係る。名物　柿羊羹

横川驛を過ぐる比、左窓近く一大伽藍を見るは、即ち佛護寺。己斐は廣島市街の西郊一江水を隔つるのみ。五日市、二十日市を過ぐれば、宮島なり。

一【宮島】に至れば、海上十數町を隔て、、翠綠鬱蒼たる一大島の前に、一大華表の浮ぶが如く、海中に立つを見るべし、其後層氣樓の如き回廊の連なるは、問はずして嚴島神社、社の左方丘上高く聳ゆるは、豐太閤第一征韓の記念千疊敷及五重塔なり。

宮島より玖波大竹あたり、海面の風光佳なり、大竹の西小瀨川を渡る、川は藝防一の界、慶應年間長州征伐の時の激戰地、川の上流魚切蛇喰の奇勝あり。

一【岩國】は吉川氏の舊地、町は驛の右窓一里餘を隔て、錦帶橋あるを以て普く世に知らる。

藤生、由宇を過ぎて大畠に至れば、左窓屋代島の青巒を見るべし、島と陸との間は卽大畠の瀨戸、潮流激甚なり。

一【柳井津】は大畠瀨戸の西北に灣入せる灣頭の一港にして、古の大島津、此地中世海賊衆ありて、一方の雄帥たりき。義經の壇ノ浦攻擊の船舶を整ふるや、又こゝに於てせりき。名物　三角餅

田布施驛の北一里岩代山あり、これ維新の際に於ける長州騎兵隊の養成所なり。

下松より德山に至る沿岸風光佳なり、特に魚ケ邊一帶、奇石怪岩汀邊に横はりて、笠戸の島低く波に浮び、頗る佳矚とす。

一【德山】は毛利氏の支封、地は笠戸浦の北西に隣り、島嶼に包圍せらる。村の東端殉難七士の碑あり、故兒玉大將は實に此地の出身、伯の創設に成る兒玉文庫あり。

海軍煉炭所を有するは此地の誇とする所、福川、富海を經れば三田尻。

一【三田尻】は。繁盛殷賑の海驛なり、向島其灣口に當りて門屋口の瀨戸あり、北に連れる市街を宮市と言ひ、殆んど同一市街の觀あり。宮市天神は酒垂山に在り。樓門廻廊丹朱煥然たり、國分寺其東北にありて、幽邃古雅愛すべし。此地の鹽田防長二州の最たり。名物　園の露

三田尻を後にして進めば、右窓玉祖神社を見るべし、これ周防一ノ宮、玉作氏の祖廟なり、大道驛の附近は白沙青松、海面の展望佳なり。

一【小郡】は山口に至るの道、町の中央泉峯に、中領八幡宮あり、大内氏の建立に係る、社背公園を設く。

嘉川、阿知須を過ぐれば長門國、船木町は驛の西一里を隔つ、神功征韓の船を作りたまへる所なりといふ。

一【厚狹】は厚狹川の東岸、大嶺線の分岐點、世に赤間石と稱する硯材は、今專ら此

川附近より砌出すもの。

埴生驛に至る、左窓一帶の海濱は糸根の松原、豐の連峯展望新なり。小月を過ぐれば長府、古の府中なり。仲哀天皇の豐浦宮址あるを以て、豐浦里といふ。二宮八幡宮祠の地卽それなり。地は東面して海濱に居り、西に山を負ふ、南に磯山あり突出す、串崎といふ、山に毛利の館址、内藤の壘址あり、羊腸たる石徑、青苔露滑にして崖下白浪常に雪を捲く、松崎八幡宮あり、觀月の名所とす。

一ノ宮驛あたり、左窓鬱たる森林中、壯麗なる社殿を見るべし、これ一ノ宮住吉神社にして、神功征韓の後、直に此處に鎭めたまひし名神なり。幡生驛を過ぐれば、汽車は間もなく下關に達す。

一【下關】は山陽線の盡くる處、地は海峽の北岸に位し、水を隔つるの靑山はこれ鎭西、門司と相對して、瀨戸内海の咽喉を扼し、形勝天與の要津たり。關釜連絡船あり、毎日一回隔日二回の發著ありて、日韓交通の便を備ふ。壇ノ浦、赤間宮、春帆樓、引接寺等、平家沒落の哀、日淸折衝の活劇、收めて驛東半里餘にあり。

名物　硯　雲丹

一【門司】は九州線の起點、馬關と一葦帶水斜に相對せり、關門連絡航路僅に一海里人其短きを恨む。想ふ十數年前人烟蕭疎の寒村、今夢の如き殷賑の地となり、水陸運輸の咽喉、東西交通の衝點たり。

汽車西に走りて大里を過ぐ、幕府時代九州諸侯の參覲は、此地より赤間關に航するを例とせり。左窓近く小丘の見ゆるは柳ノ御所、安德天皇の行在所、疑もなく大里は内裡の轉訛したるなり。これより巖柳島を右に眺めて、聞長濱を進めば小倉

一【小倉】は小笠原氏の舊地、城址今第十二師團の營所たり、左窓近く見るべし。鐵道は此に分岐し、東走するものは、中津、宇佐に至り、西走するものは、一は戸畑、枝光、八幡を經、一は大藏を經て、黑崎に合ふ。戸畑は古の鳥幡、洞海の東南岸、右窓海中に突出する岬角を見るは、仲哀記の魚鹽地、名籠屋崎なり。海灣は門戸

最狹隘にして、宛も湖沼の如し、東北の門口を岬門といひ、今の若松港これなり。枝光は卽製鐵所のある處。烟突林立して煤煙空を覆ふ、若松の港近く指すべし。黑崎を過ぎて折尾に至る、此地若松より、南直方、伊田等の、筑豐二州の炭田所在地に通ずる線路の交點たり。門司より此處に至る間一帶の海濱石炭の山をなす、また盛なりといふべし。赤間、福間のあたり。一帶の林丘凡てこれ矮松、汽車翠綠の間を走りて心地すがゝし。福間に至れば右方一大華表あり、これ宮地嶽神社に賽するの道、宮は運神とて參拜の人絕えず。香椎は官幣大社香椎廟宮のある所、左窓近く拜するを得べし。

香椎箱崎の間一水緩に流れて、名島に至りて海に入る、川は多々良川濱もまた其名に呼ぶ。尊氏西奔の時、肥後の菊池氏南朝の爲に、數小貳大友と激戰せる處、汽車此間を走りて海の中道を右に見つゝ、進む、風光明媚なり。箱崎驛に至る、八幡宮の背後なり。宮は筑前一ノ宮にして官幣中社、華表の前一直線に博多灣に面す、

海は元寇十萬の艨艟、神風の爲に覆滅せられたる處、これより博多に至る間、矮松白沙の間を走る、これいはゆる千代ノ松原、福岡市の東公園とす。吉塚に至れば、元寇紀念の龜山天皇及、僧日蓮の銅像、巨然として松林の中に峙つを見るべし。

【博多】は福岡の東に竝び、那珂川を隔つ、今福岡と合して一の市となる、古より海外貿易の市場として、其名中外に響けり。驛を出づれば右窓僅に櫛田神社を望むべし、菊池寂阿が北條英時を攻めむと馳せ上りし時、矢を神扉に放ちて進まざりし馬を進めたるはこゝなり。名產 博多織、博多人形。

博多より汽車は直路南を指す、これより矢部川に至る間、山野田畦の間、多く櫨紅葉を見る、晩秋の眺紅楓より美なり。雜餉隈、二日市あたり、凡てこれ太宰府の舊址、音に名高き天滿宮は、二日市驛の左三十町を隔つ、左窓遙に聳ゆるを見るは、太宰府の東なる寶滿山にして。恰も是に對する如く右窓に見ゆるは、天拜山なり、寶滿山下の竈門山神社は、古來筑紫の總鎭守と稱せらる、天拜山は菅公

拜天の古跡、山頂孤松あり、恰も人の立ちて天に祈るが如し。驛に近く武藏溫泉あり。

原田驛を過ぐれば肥前に入り、田代、鳥栖を經て、筑後川を渡りて筑後に入る、鳥栖は長崎線の分岐點なり。

筑後川は九州第一の洪流、利根の阪東太郎に次で筑紫次郎と稱し、吉野川の四國三郎に兄たり、山陽が水流如箭萬雷吼といへるが如く、また急流なり。

一【久留米】は川の西南、有馬氏の舊府、城址は筑後河畔にあり、篠崎神社あり有馬氏の祖を祀る、驛に入らむとして左窓見るを得べし。名高き水天宮もまた川に臨めり、川を渡る時右窓拜するを得べし。烈士彦九郎の墓は、寺町遍照院にあり、香煙常に絶ゆることなし。名產　久留米飛白

高良山は高五百尺に過ぎずと雖、形狀屹然たり、山頂高良神社は筑後一ノ宮、神籠石塚は古史に所謂磯城瑞籬、汽車は左窓に眺めつゝ、走る、羽犬塚、矢部川、渡瀨を過ぐれば大牟田なり。

一【大牟田】は三池採炭以降勃興の市邑、三池の西に接して海に臨む、三井家巨資を投じて築港の計を爲せり、地は筑後の極南、諏訪川を渡ればやがて肥後なり。長洲に近づけば、有明海初めて車窓の目に入りて快言ふべからず、海の彼方に峨々として聳ゆるは島原の鎭山溫泉嶽、一に雲仙ともいふ、これより八代に至る間、絶えず車窓の目を樂しましむ、一帶の海濱は古の腹赤濱、腹赤贄を奉りしはこゝなり。

高瀨は菊池川の右岸、丁丑の役戰陣の衝に當れり、これより南木葉、植木のあたり、彼山此水悉く血戰奮鬪の跡なり、此間汽車は、右窓に三ノ嶽を望み、左窓に丘陵起伏南北に亙るを見る、丘陵は卽田原坂にして、三ノ嶽の中腹は吉次越、共に苦鬪難戰の地なり。田原坂上崇烈碑あり、左窓樹間に隱見す。

一【熊本】は細川氏の舊地、城は加藤淸正の築く處、樓櫓壘壁布置整正、久しく天下

の名城と稱せらる、今第六師團司令部茲に置かる。惜しいかな、丁丑の役甚く舊觀を損したれど、孤軍固く嬰守して屈せざりしを思へば、城の面目更に新なるものあるを覺ゆ。上熊本驛に至れば、右窓近く山に據れる一大寺院を見るべし、これ鬼將軍の靈を安んずる發星山本妙寺なり。別に加藤神社あり、京町臺に祀る。金峯山を右に仰ぎつゝ、熊本驛に至れば、右窓近く花岡山あり、これ薩軍の砲壘を設けて、熊本城を砲擊したる處。名物　朝鮮飴　毒消丸

熊本を後にしてより、左窓東北を望めば、群峯天を指し、中央の一山熾に煙を噴くものあり、これ世界有數の活火山たる阿蘇の靈峯なり。白川、綠川を渡りて宇土に至る、嘗て小西行長の治城たりき。左窓一山平野の間に特起するを見る、これ木原山にして、また雁廻山ともいふ、昔鎭西八郎爲朝此山に在城して飛雁を射る。今に於て飛雁峯上に亂行すと、故にこの名あり。此地三角線の分岐點、三角は恰も盆景の如く、風光の美肥後第一と稱せらる。松橋を過ぐれば、坦々たる田畝海に連りて遙に天草島を望む。往古蒼海の域、堤を築き潮を排して、今かくの如き肥田となる、八代の郡築新地は近時已に其成を告げて、年々收穫を增しつゝあり、左窓眼を放てば、山嶽重疊其奥はかるべからず、平家の隱れ處と傳へらる、五箇莊といふは、氷川溪谷の奥にして、有佐驛より至るべし。

一【八代】は球磨の急流の海に朝する處、南朝史に隱れなき征西將軍懷良親王を祀れる八代宮は、松江城内にあり。御陵は宮地村の悟眞寺域にあり、八代を發して、左窓妙見山下、一叢の林樹鬱蒼たるを見るはこれなり。名物　鮎のうるか　朱欒

八代より南、汽車は球磨川の右岸に沿ひて坂本に至り、鎌瀨の鐵橋を渡りて左岸に移り、白石、一勝地驛を經て、渡の鐵道を渡り、更に右岸を走りて人吉に至る。川は日本三急流の一、人吉八代間十六里の舟行、僅に五六時間を要するのみ。河中岩石磊々幾千萬なるを知らず、峯巒時に脚を水底に挿んで往く水を碍げ、茲に三十三の急瀨を成す。時や晩秋なり、兩岸の林樹紅を呈して、岩の紫黑と水の青

白と相映帶して、うたゝ車窓の目を慰むるものあらむ、藍溪の白雲紅葉峽中秋、石馳山走舟頻轉、欲寫奇峯不自由の嘆、豈舟のみに限る恨ならむや。白石驛の對岸、岩戸山の中腹鍾乳洞あり、高五十尺、間口二十間、奥行四十餘間、池あり神龍棲息すと傳へらる。

一【人吉】は球磨川の東西に跨れる相良氏の舊地、城址は河の南岸、河水を利用して要害をなせり、人吉神社あり、相良氏累代の靈を祀る。驛に近き青井神社は、大同元年の創建、歌あり、「球磨で名所は青井の御門前は蓮池櫻馬場」と、境内頗る閑靜なり。名物　香魚　柿

人吉町の盡頭、汽車は三度球磨川を渡りて矢嶽に向ふ、其間直路僅に十哩に過ぎず、されど其高低の差實に一千四百呎に近し。されば茲に其距離を延長し、兼ねて勾配を緩かにするの必要より、其中間大畑に鉢卷形の輪線を作る、輪の長さ約一哩四分の一、上下線の交錯點に於ける施工基面の高低の差百七十呎なり、此間線路は三十三分一の勾配なるが故に、本線外に水平線を作り、大畑驛の設あり、天下の難工事と稱せられたる、矢嶽隧道は肥日の界、隧道を出づれば、霧島の峯巒波濤の如く連り、眞幸平の平野遠く見えて景致雄大なり。

一【吉松】は大隅の最北端、久しく鹿兒島線の終點として、物貨集散の衝たりき、栗野驛に至れば、驛の南に接して祠あり、勝栗神社といふ、舊八幡神社なり、征韓の役、義弘松尾城を發して、途此社に參詣す、折しも夜來の大雪にて天地一白、義弘歌うて曰く、「野も山も皆白旗となりにけり今宵の宿は勝栗の里」と、故にこの名あり、城址は北七町を隔つ、右窓栗野河畔其城壁を見るべし、右名なる島津氏の金山は、横川驛より二里を隔つ。牧園驛は霧島登山者の下車すべき處、山腹溫泉散在せり。嘉例川驛は附近鹽浸、日ノ出、山ノ湯各溫泉あるを以て著はる、彦火火出見尊の高屋山上陵は、俗に神割岡といひ、驛の北三十町にあり。

一【國分】は烟草の產地として古より名高し、驛に入らむとして右窓鹿兒島神社を見

るべし、社は彦火火出見尊を祀れる官幣大社にして、いはゆる大隅正八幡宮、社說高千穗宮の址なりと傳ふ。高千穗峯の西麓なる官幣大社霧島神宮には此驛より詣づるをよしとす、隼人塚は驛の南三町、鐵道踏切の傍にあり、五重の石塔二基、四天王の石像一體を建つ、塚は隼人と熊襲梟帥との靈を合祀したるものとぞ、荆棘蘿蘿に埋れて、古色蒼然たり。

國分より汽車は錦江灣の海近く、弓形をなして走り、鹿兒島に至る。國分平野を過ぐれば加治木、義弘の城址は反土にあり、今僅に其址を存す、驛の當面蛇王嶽峙てり、山勢湧くが如く、奇峯直に天を衝かむとす、龍門ノ瀧は西遊記によりて、早く其雄大なるを知られぬ。重富驛に至れば直に錦江灣に臨む、一帶の海濱は脇元濱、右は名に負ふ白銀坂、乃至岩劔山の嶮あり、左は加治木、國分の江灣遠く連りて、烟波漂渺、遙に日隅の峯巒を望むの風光、得も言はれず。汽車は是より迂餘曲折して、脇元の海岸を走りて薩摩に入り、大崎ケ鼻に進めば、鹿兒島の市街はや眸中に入るべし。

一【鹿兒島】は島津氏の府城、丁丑の役城市焚蕩、血流尸丘の酸鼻を見たれども、今稍復する處あり、形勝居然、西南の一都たり。城址は新舊數所あり、市の北淨光明寺の陰、青木川の西に、清水城址あり。市の北多賀山の澁、青木川の東に、東福寺城址あり。清水の西南なる大龍寺址は、南洲の私學校を建てし處。家久始めて鶴丸城に徙りて維新に及ぶ、今第七高等學校造士館のある處卽これ。後は連山の嶮を屏障とし、左右は長河山野を襟帶し、前は裏海に臨みて、天然の濠池を構へたり。城山は卽ちその背後の山、中に一凹地あり、岩崎谷と呼ぶ、これ三十餘年前、薩摩隼人が刀折れ彈盡きて、悠然として死地に就けるの址、碑あり、題して南洲翁終焉之地といふ、別に岩崎谷洞中紀念碑あり、後面翁の辭世の詩を刻す。谷の東北なる一丘陵を、淨光明寺岡といひ、翁以下の靈骨を埋む、大墳小墳累々として相連り、香煙縷々として絶えず英魂を弔す。木像あり、神采生動するが如

し。地は錦江灣を隔て、櫻島と相對し、風光名狀すべからず、足鹿兒島に入りて此處に賽せざるものなく、此處に至れるもの、又加治屋町なる南洲甲東兩翁の誕生地を訪はざるはなし。城山の南邊照國神社あり、薩藩近代の英主齊彬公を祭る。社の近傍鶴峯神社、招魂社等あり、島津家の近代及戊辰の役の戰死者を祭る。若しそれ鹿兒島灣の風光は、普く世に喧傳せらるゝ處、「月花のみるめのみかは櫻島浪の花さく夕べあけぼの」絶頂常に白雲を蒸發して、青漆の盤上に香爐を置けるが如く、朝霞夕霧の蒸すところ、千態萬狀の奇を呈して、城内萬戸の眺に入る。しかも海水浪穩かにして、宛然大湖の如く、浮ぶかとまがふ二三の小嶼散在して、景いよ〳〵新なり、島の左右鍾秀降神の氣の鬱たるは霧島山なり、鉤爪雄偉の勢の壯なるは高熊嶽なり、更に南芙蓉芳艶の象の美なる開聞嶽あり、市の東なる多賀山は、市の全景と灣の風光を見るによろしく、木は老いて松籟亦聞くべし、山は丁丑の役官軍の據つて城山を砲擊せし處、山の下を祇園洲といふ、もと砲臺のありし處、老松嗟呀として風光佳なり。生麥事件英艦來りて寇するや、此砲臺最激しく砲擊せしが、敵彈も亦此に集中して遂に崩壞せらるゝに至れり。今丁丑の役の官軍墓地たり。岸角をめぐりて磯の濱に至れば、磯天神あり、櫻島の村落歷歷指顧の間に落ちて來り、呼べば乃ち應へむとす。島津公の別館仙巖園あり、江山の勝を占め、林泉の美に富む、園は萬治年中、光久公によりて建てられ、天明年中、重豪公重修して三十六景の勝を選び、清人の題詠を求めて石に勒せらる。館の東を花倉といふ、「大君の爲には何にか惜しからむ薩摩の瀨戸に身は沈むとも」月照の西鄕と相抱いて海に投じたるは、實に此沖なりき。墓は市内松原の南林寺址にあり、塔に靜溪院鐵水清月比丘と刻し、平野國臣の和歌を題せる燈籠二基を建つ、俊寛僧都の鬼界ヶ島に渡りし址は、俊寛堀といひ、中町御着屋にあり、堀は今埋められて一基の紀念碑あり、甲突川の河口に當る。川の海に注ぐ處は洲崎の濱、干潮の時平沙數十町に亙る、流を隔て、天保山あり、江山の景又鑑賞に値す。

市の南二里なる谷山の慈眼寺址は紅葉の名處、高雄山より移植せしもの、池塘秋意多く、楓葉錦を織りて如月の花よりも紅なり。「劍打つ波の平より海見ればとぎすましたる色にこそあれ」劍工橋口氏によりて名高き波平は、鹿兒島より谷山に至る途なり、有名なる三條小鍛冶宗近は宗祖正國の弟子、行安、安行、安張、勘之丞、安行等斯界に名高き人多し。谷山の南七ッ島あり、櫻島の望觀此地を以て第一とす。名産　飛白、煙草、薩摩燒、竹細工、輕羹、高麗菓子

大津繪節

鹿兒島で名物は早く目につく櫻島　よめじよ達ばらを乘せあたまの商ひ　谷山の女の　さかな賣り　新照院の棒だんご　ごんめ餅　武のそば　水のうまさはによど水　鹽屋ごぜ　おさんが　さげ重でやつて來た　小にせに唐芋　あめ附揚かなぼこ　たえばせぬ

古今交通比較

昔

嘉永四年松平薩摩守
齊彬公御家督の後初
御入部の節三月九日江戸御發
御道中左の如し

○東海道伊勢路日數十五日
（但鎌倉廻り）

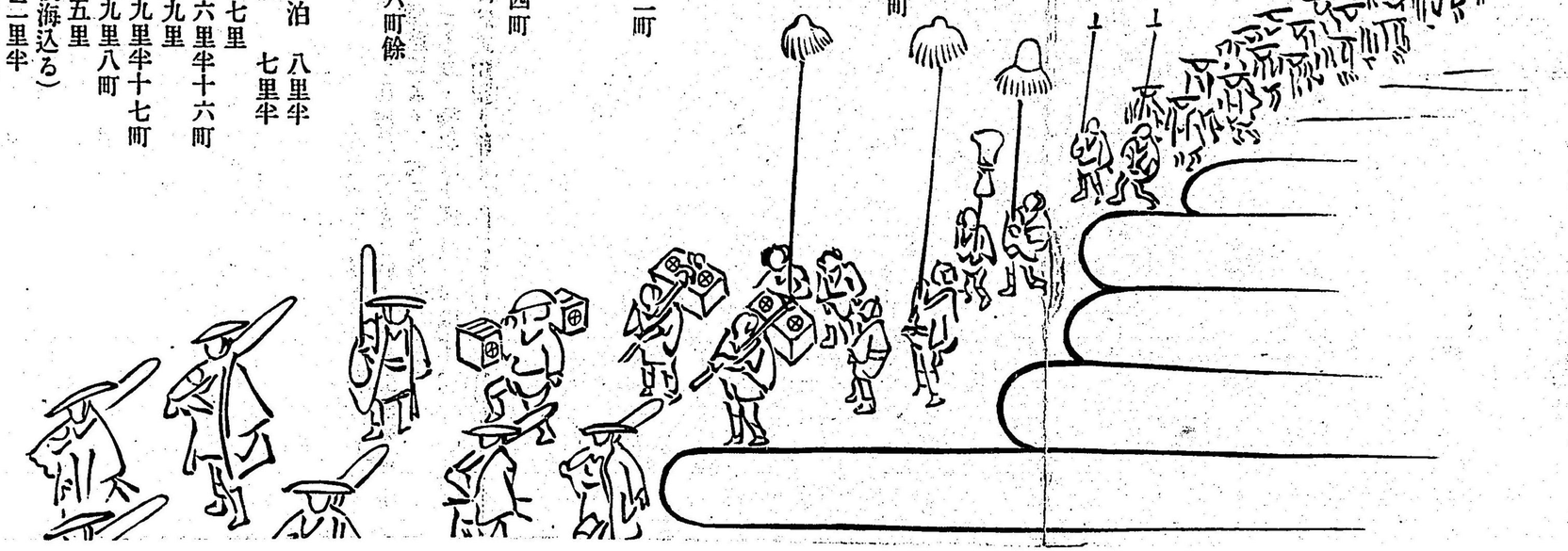
第一日　江戸發　程ヶ谷泊　七里二町
第二日　程ヶ谷發　藤澤泊　九里三町餘
第三日　藤澤發　小田原泊　八里八町
第四日　小田原發　三島泊　八里
第五日　三島發　興津泊　十二里十町
第六日　興津發　藤枝泊　九里十一町
第七日　藤枝發　見附泊　十里半十町
第八日　見附發　白須賀泊　十里八町
第九日　白須賀發　岡崎泊　九里半十一町
第十日　岡崎發　宮泊　八里十四町
第十一日　宮發　桑名泊　九里
第十二日　桑名發　龜山泊　九里八町
第十三日　龜山發　水口泊　八里十四町
第十四日　水口發　大津泊　十里十町
第十五日　大津發　伏見泊　四里
御逗留中三日
第十九日　伏見發淀川下り　大阪泊　九里十二町
御逗留中三日

○中國路日數十六日

第二十三日　大阪發　兵庫泊　十里
第二十四日　兵庫發　加古川泊　九里半十四町
第二十五日　加古川發　正條泊　七里半
第二十六日　正條發　片上泊　七里半
第二十七日　片上發　板倉泊　八里
第二十八日　板倉發　矢掛泊　五里半十六町餘
第二十九日　矢掛發　神名邊泊　六里
第三十日　神名邊發　三原泊　九里
第三十一日　三原發　西條四日市泊　八里半
第三十二日　西條四日市發　廣島泊　七里半
第三十三日　廣島發　玖波泊　七里
第三十四日　玖波發　玖珂泊　六里半十六町
第三十五日　玖珂發　福川泊　九里
第三十六日　福川發　小郡泊　九里半十七町
第三十七日　小郡發　吉田泊　九里八町
第三十八日　吉田發　下之關泊　五里

○九州路日數十三日（但渡海込る）

第三十九日　下之關發　小倉泊　二里半
第四十日　小倉發　飯塚泊　十里八町
第四十一日　飯塚發　松崎泊　九里二町
第四十二日　松崎發　瀨高泊　八里
第四十三日　瀨高發　山鹿泊　八里半七町
第四十四日　山鹿發　川尻泊　八里三町
第四十五日　川尻發　日奈久泊　十里半
第四十六日　日奈久發　佐敷泊　五里六町
第四十七日　佐敷發　出水泊　十里四町
第四十八日　出水發　阿久根泊　四里半三町三十六間
第四十九日　阿久根發　向田泊　六里半十七町二十間
御逗留中一日
第五十一日　向田發　苗代川泊　六里半四町五十四間
第五十二日　苗代川發　鹿兒島著　五里半七町四十間
御道中日數四十五日
里程三百六十六里半三町三十間餘



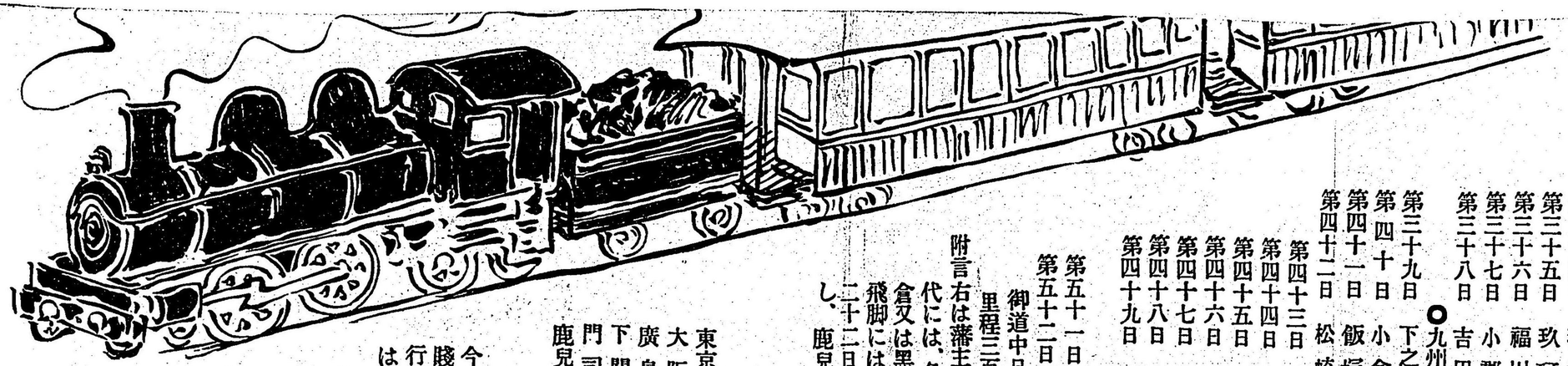
第二十四日　兵庫發　加古川泊　九里半十四町
第二十五日　加古川發　正條泊　七里半
第二十六日　正條發　片上泊　七里半
第二十七日　片上發　板倉泊　八里
第二十八日　板倉發　矢掛泊　五里半十六町餘
第二十九日　矢掛發　神名邊泊　六里
第三十日　神名邊發　三原泊　九里
第三十一日　三原發　西條四日市泊　八里半
第三十二日　西條四日市發　廣島泊　七里半
第三十三日　廣島發　玖波泊　七里
第三十四日　玖波發　玖珂泊　六里半十六町
第三十五日　玖珂發　福川泊　九里
第三十六日　福川發　小郡泊　九里半十七町
第三十七日　小郡發　吉田泊　九里八町
第三十八日　吉田發　下之關泊　五里

○九州路日數十三日(但渡海込る)

第三十九日　下之關發　小倉泊　二里半
第四十日　小倉發　飯塚泊　十里八町
第四十一日　飯塚發　松崎泊　九里二町
第四十二日　松崎發　瀨高泊　八里
第四十三日　瀨高發　山鹿泊　八里半七町
第四十四日　山鹿發　川尻泊　八里三町
第四十五日　川尻發　日奈久泊　十里半
第四十六日　日奈久發　佐敷泊　五里六町
第四十七日　佐敷發　出水泊　十里四町
第四十八日　出水發　阿久根泊　四里半三町三十六間
第四十九日　阿久根發　向田泊　六里半十七町二十間
第五十一日　向田發　苗代川泊　六里半四町五十四間
第五十二日　苗代川發　鹿兒島著　五里半七町四十間
御道中日數四十五日
里程三百六十六里半三町三十間餘

附言右は藩主初御入部の時なるを以て、行程幾何か延滯あり、通例の參覲交代には、多少の伸縮はあれど、五十日内外なりきといふ。藩士の往來は、小倉又は黑崎より、大阪まで船路により、約三十日内外なりき。

飛脚には中急、急、極急の三あり、極急は十四日、急は十八日、中急は二十二日の定なり。中急は定式飛脚と稱し、月に一回二十九日を定日とし、鹿兒島江戸邸兩所より發し、諸人の賴信をも許されたり。



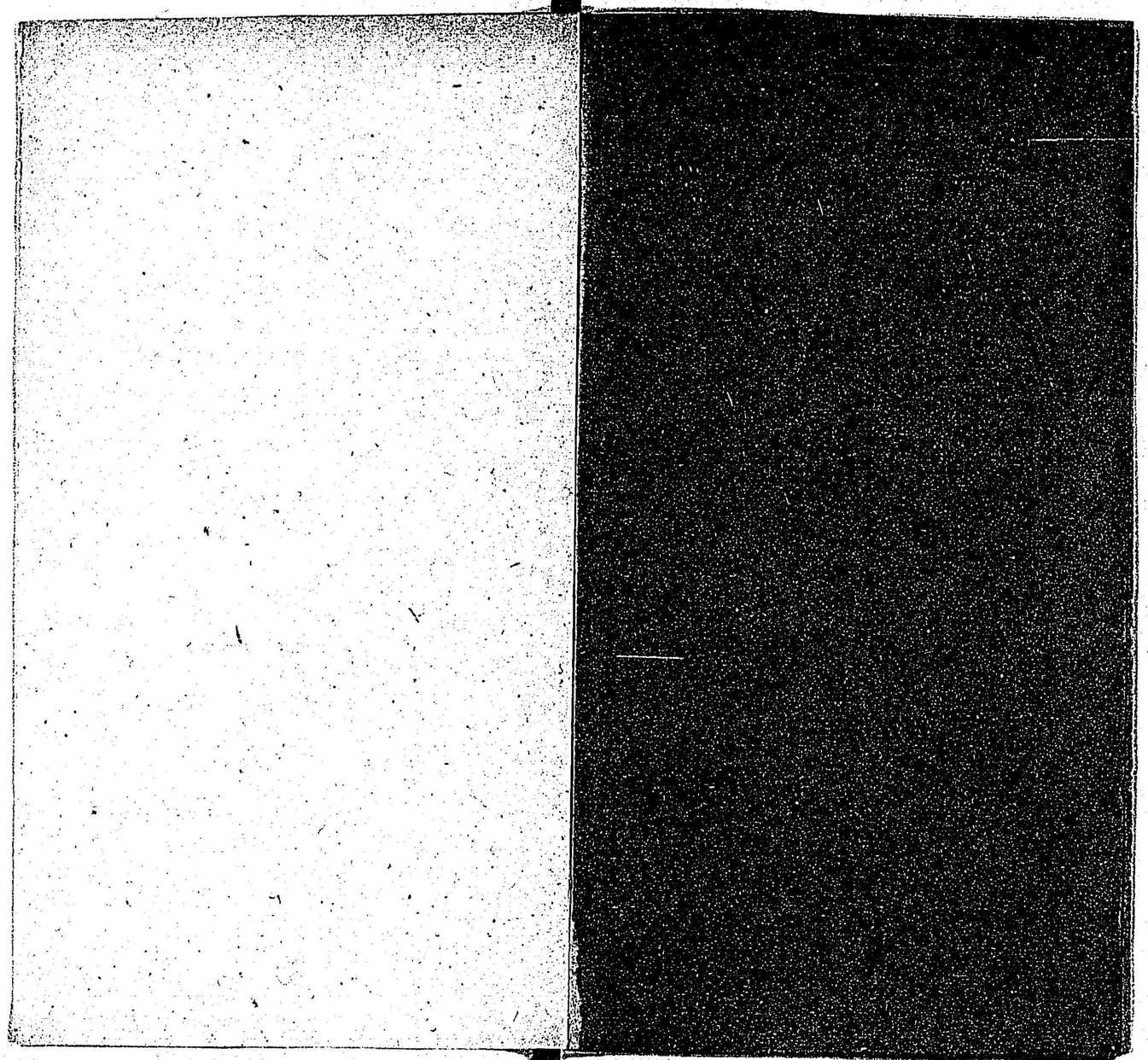
今

東京新橋發第一日　午後五時十五分
大阪發　第二日　午前七時四十三分
廣島發　同　午後五時十五分
下關著　同　午後十時五十六分
門司發　同　正子十二時
鹿兒島著　第三日　午後三時二十五分
日數三日　運轉時間四十六時十分
哩程九百四十三哩一分

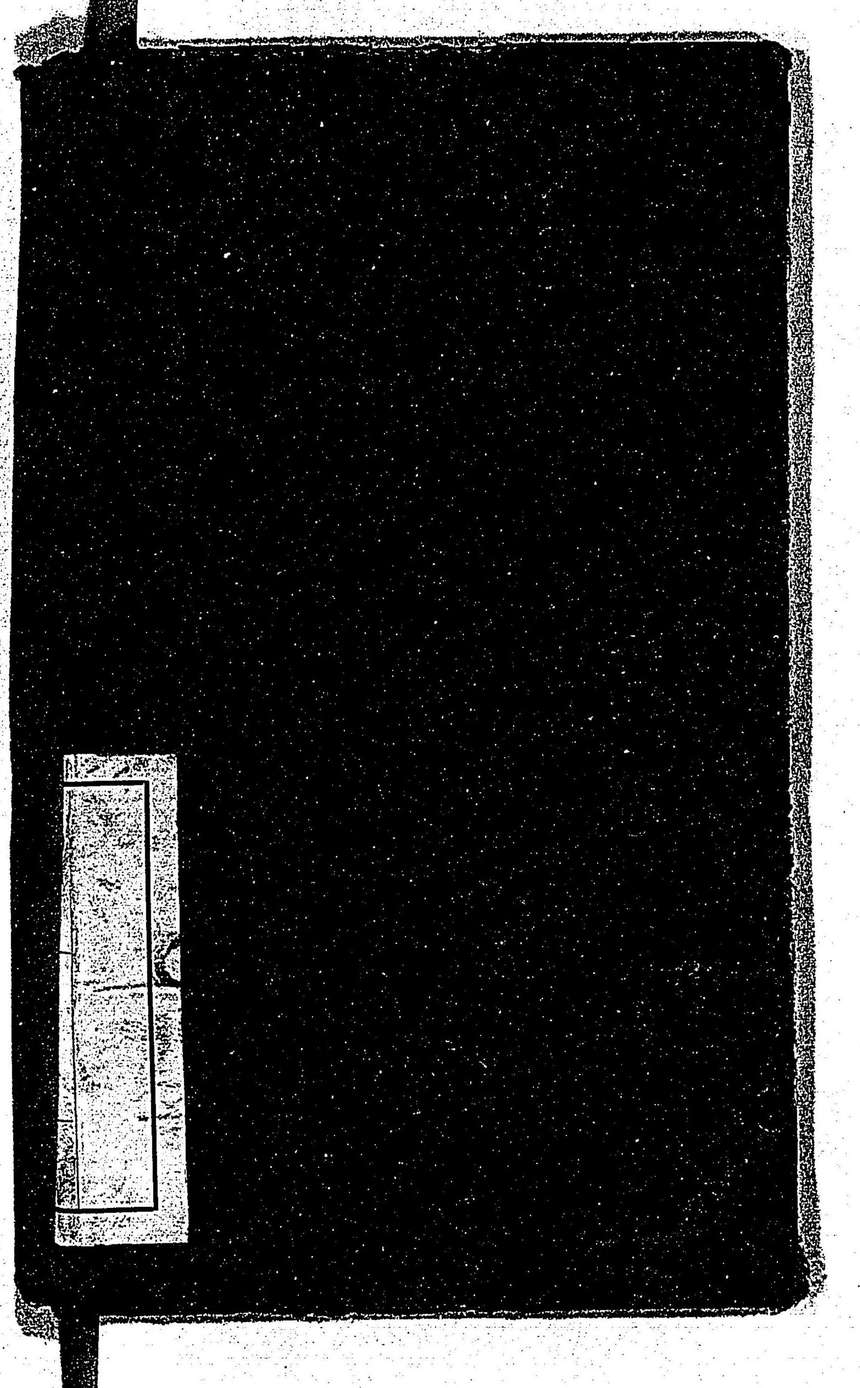
今舊幕時代江戸より薩摩に至るべき旅費を推算するに、固より貴賤上下によりて同じからざるは言ふまでもなけれど、幕府代官旅行の節の旅籠代は、主人一泊錢三百文、附添の手代並侍足輕中間等は錢百五十文づゝ、外茶代一泊二朱の定なり、之に晝支度料として百五十文を加ふれば、一日壹貫三百五十文となる、今假に之を標準として旅行三十日とすれば、四十貫五百文を要す。駕賃、草鞋代、船賃、小休憩料等は此外なり。尙荷物多くして馬を雇ふとすれば、道中御定の荷物貫目は、本馬三十六貫まで、輕尻三貫目より六貫目まで、人足五貫目までにて、人足賃は本駄賃の半額、から尻は本駄賃の二倍を三分したる額なり。

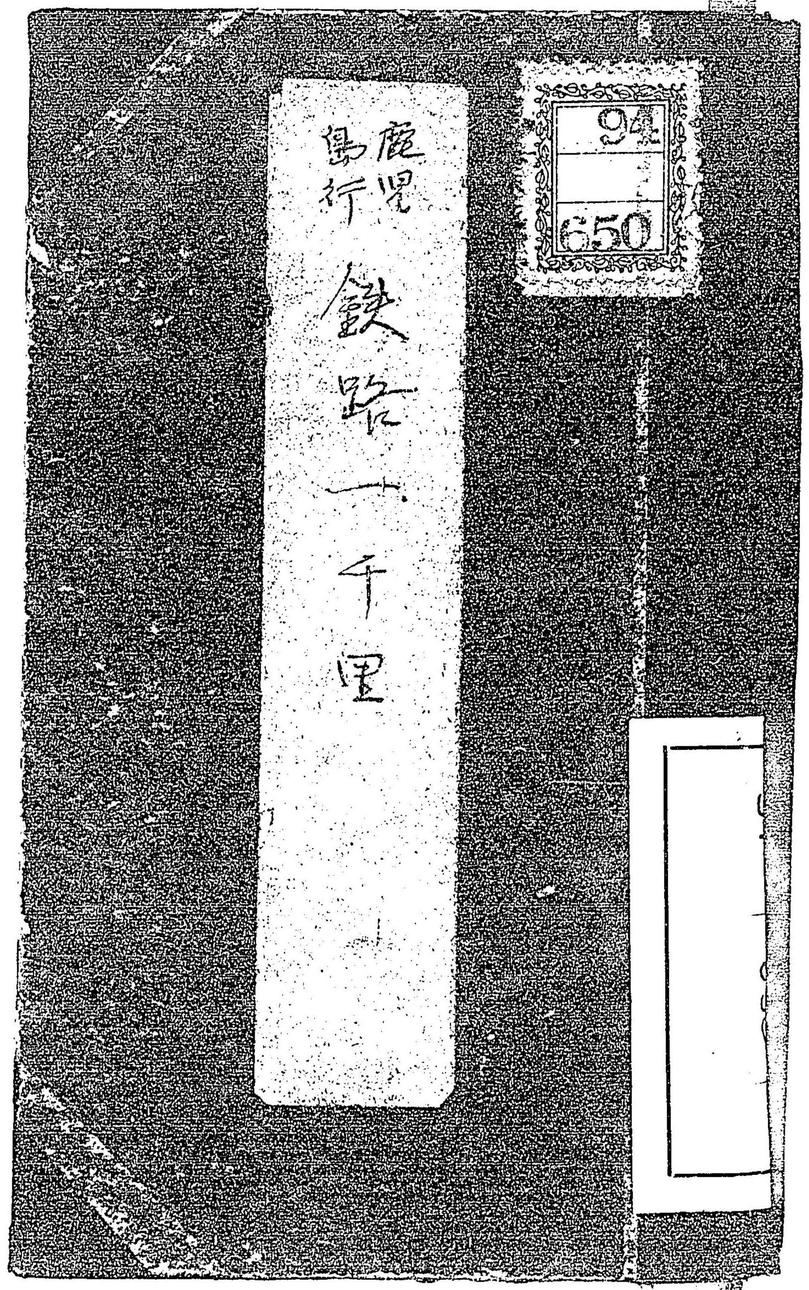
今道中記によりて通算するに、江戸より鹿兒島までの本駄賃は十八貫九百文餘となり、旅籠代と合して五十九貫四百文を要す。一兩を七貫二百文とすれば、八兩貳分なり。今汽車賃は、一等拾九圓六拾參錢、二等拾壹圓八拾壹錢、三等七圓八拾七錢、車中六度の食事をなすとし、一回五拾錢平均と假定すれば、別に食事料參圓を要すること、なるなり。而して手荷物は、一等は百斤(十六貫目)二等は六十斤(九貫六百目)三等は三十斤(四貫八百目)まで、無賃託送をなすことを得。

94
680



94
650





026177-000-2

94-650

鹿児島行鉄路一千哩

鉄道院

M42

ADC-3862